

“好きこそ物の上手なれ” と “凶星を言う”

院長 石川 丹

教育とは子どもがまだ出来ていない事が出来るように教え育む事と理解されますが、こう考えると子ども達は“困難を乗り越えよ”“苦あれば楽あり”を要求されている事になります。当クリニックを訪れて来る親御さんは、子どもがあれこれ様々な事が出来ない、と訴えて見えますが、親の訴えを子どもの立場に立って考えてみますと、子どもは「困難を乗り越えられない！」と悲鳴を上げていることになる、と思います。

そういう子ども達に対して当クリニックが実践している心理療法は“困難を乗り越えよ”ではなく、“出来ちゃった感”がたくさん湧き上がるように促す方法です。達成感があればやる気が育つからです。

乗り越えられない困難のハードルは高いから乗り越えられない訳ですが、ハードルが高くても、低くしなくても、乗り越えられる場合があります。高くたって得手を生かせば乗り越える事は可能です。“好きこそ物の上手なれ”“得手を伸ばせば不得手は付いて来る”だからです。

その子が「やれそおっ」と思えるような方法とその手本を呈示する事が一番です。やり易いと思えるようにするには得手を生かす事です。その子の得手を知るには、その子の立場に成って考える事です。昨年流行った言葉“国民目線に立つ”です。人間誰でも凝ってる事や拘っている事は面白いからであり、やっててやり易いからです。拘りの中にその人の得手を見つける事が可能です。

得手でもって困難を乗り越えることができる方法を提案することが、発達に困難を来たす場合の心理療法である“好い事作り心理療法”の基本です。具体的方法は当 HP の発達研究センター報告その 22「子どもの困った行動の解決を目指した関わり方をお教えします～“好い事作り心理療法”～」を御参照下さい。

ソクラテスが言った“汝自身を知れ”は子どもが大人になる発達過程そのものを言っている言葉です。子どもは 4～5 歳になると他人の立場で物事を考える事ができるようになります。国民目線に立って考える事ができるようになります。幼児はごっこ遊びによって他人の立場で考える練習をしています。これが“汝自身を知る”ようになる芽生えです。

次いで大人になる直前の段階、即ち、思春期になると子どもは“自分見つけ”を始め

ます。自分を見つめ直し、我が身を省みて自分が何者であるのか思い悩み洞察し、自分のアイデンティティー（自己同一性）を探し、汝自身を知って大人になろうとします。

当クリニックに連れて来られる子ども達は自分自身を知ることに苦勞しています。子ども達の困難を取り除くための基本的関わりの一つは“凶星を言う”です。

親御さんや子どもに関わる大人（療育機関、デイサービス、作業所、児童館などの指導員、保育士、幼稚園学校教諭、児童相談所職員…）は子どもの思い、気持ち、感情、欲求を理解したら、それをズバリ言い当てる形で口に出して言って聞かせる事、つまり代弁して言って上げる事が“凶星を言う”に相当します。

自分の思い、気持ち、感情、欲求を理解して、自分で自分に言い聞かす事が上手くないからこそ、“押して駄目なら引いてみな”と歌われる人生の波乗り術、処世術を上手く使って実行する社会生活に苦勞している子ども達は、凶星を言われることによって自分の心の内に気づく事ができるようになります。

“凶星を言う”は“汝自身を知る”手助けそのものです。子どもが怒ってたら「怒ってるんだ!」、落ち着きなく騒いでいる時は「テンション上がってるよ!」、抱っこしてもらいたがって愚図ってる時は「抱っこしてもらいたんだ!」、積み木遊びの最中に積み木を手にしたら「積み木取れたね!」など、大人がズバリ言うと、子どもは自分が他人からどう見られているかに気づきます。我と我が身に気付くのです。

ですから、他人の立場で物事を考える事、つまり他者視点の心理発達が促されるのです。あたかも自分を鏡に写すかのようにして他の人と自分を見比べ、他の人から学び取りつつ結果的に自分自身を知る、つまり“汝自身を知る”を実行して自分の対象化が促され、自分で自分に言い聞かす事が上手くなり、“押して駄目なら引いて見な”と歌われるような処世術も上手になり、子ども自身にとってだけでなく、大人にとっても好ましい行動が増えることになります。